

幼なじみが6人

ゆーねるねる

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

美竹優成と幼なじみ5人の物語。

# 目次

始まりのクラス発表	1
クラス発表からのお話。	3
一緒に飯!?	7
学校2日目	10
蘭の感情	13
慣れてきた学校	16
優成への悲劇	19
今までの記憶	23
お久の学校	26
有村の嘘	29
真相	34

## 始まりのクラス発表

俺は美竹優成だ。今から高校の入学式だ。良くみんなに勘違いされることもある。幼なじみの5人がいるのだけでも、そいつらの中の1人に美竹蘭って奴がいる。つまり、双子だと勘違いされてし…

??? 「ねえ！優成ひどいよお〜！話聞いてよ〜！」

今話しているのは上原ひまり。とてもおっ〇〇がある子だ。何か詰めてるのだろうか。

??? 「優成。今、変なこと考えてたでしょ？」

優成 「いや、気のせいだよ。うん。多分。」

めつちや睨まれてる気がする。まあいいや、こいつは美竹蘭。俺はこいつといると双子だと勘違いされるから困っている。

??? 「今くらいの男の子は思春期っていうもんね〜ゆーくん〜？」

このゆったりした喋り方で一発で誰かわかる。青葉モカだ。すごいマイペースだ。

??? 「まあ！そういう年頃だよな！」

この子は宇田川巴。太鼓をやっているのだと。もしこいつが男だったら…

??? 「私は優成君とこの5人で一緒にいられることが楽しいな！」

これはつぐみだな。ちよー普通でちよー優しいね。うん。

モカ 「そんなこと言っちゃうと〜、モカちゃん、泣いちゃうよ〜」

優成 「もー着いたぞー。入るか。」

この学校は今年から、男子もOKになったから、男子が全くいないと予想される。まあ、4人くらいは居るだろ。そいつらと…

優成 「う、嘘だろ？。男子俺だけー？」

俺は1―Aだった。しかも見た感じ、幼なじみはいない。

優成 「はあくまじかよ。」

??? 「ゆーくん〜、とてもハーレムですなあ〜。」

優成 「全く嬉しくねえよ。お前らと一緒にがよかつたな〜。」

モカ 「その言葉聞けて、モカちゃん、うれしみ〜」

巴 「ま！優成のクラスに毎回遊びに行くから！」

つぐみ「あれー？蘭ちゃんはー？」

ひまり「優成と同じクラスじゃないの？」

優成「え？そうなの？あ、ほんとだ。よっしや！蘭と一緒にじゃん！でも、勘違いされんのだるいな。」

蘭はどこ行つたのだろうか。

優成「ちよつと蘭を探してくるわー。」

蘭「グスツ。なんで、私だけ違うクラスなの？グスツ」

優成「おーい？俺も同じクラスだぞー？忘れるなんてひでえな笑」

蘭「え？一緒なの？」

優成「おう！俺がいるから安心しろ！ヨシヨシツ」撫でちやう癖がある

蘭「やめてよっ！外でこんなこと恥ずかしい！／／／」

優成「ごめんごめん。みんなとこ行くぞー。」

蘭「い、や。もうちよつとこのままがいい／／／」

優成「お、おう。」かわいいと思っちまった。」

## クラス発表からのお話。

蘭を迎えに行つて落ち着かせてから皆と集合した。あの時の、蘭はちよつぴりだけ可愛かつたなく。いつもあんなんだつたらいいのに。

蘭「ねえ！聞いているの？もう始業式終わったからクラス戻るよ！」

優成「おけいー。」

蘭「もしさっきの事をみんなに言つたら…許さないから。」

優成「怖っ！多分、言いませんよ。」

蘭「多分つてなによ。とにかく！絶対にダメだからね！」

この事についてけっこー話してたらクラスに着いた。席は、1番端つこの蘭の席の1個前…おお、ラッキーやな。

最初、皆でやる事といつたらそれは、蘭がすつごい苦手な自己紹介ですかな。

先生「よーし。それでは皆、席に着いたな。そうだな。最初だし、クラスで自己紹介をせしってもらう。」

蘭「ほんとつ最悪。グスツ」

そんな簡単に涙目になるなよ笑

その後順調に皆が自己紹介をしていき、

優成「俺の番か。」

席をたち周りを見渡す。

「美竹優成です！まだつきつぱりなので、ゆつくりこの学校に慣れていききたいと思います！部活に入るかどうかとも決めてません。まあ、よろしくお願いします！」

パチパチパチツ、拍手がなつた。次は蘭か。

蘭「美竹蘭です。よろしく。」

パチパチパチツ。いや、はやすぎだろ。俺も早かつたけど、もう少しなんかあるだろ笑。

優成「お疲れ様。」

無視してきやがった。どんだけ嫌いなんだよ笑。

そして、残つてる奴らが発表していく。

これでラストか。

???「有村明日香です！私の特技はピアノを引くことです。昔から続けていたので今でも引けます。聞いてみたい人は是非、後で来てくださーい！よろしくお願いします！チラツ」  
パチパチパチツ。

「あの子かわいいね。」  
「それなー。」

めっちゃ美人な子だなー。ってか今俺見た？なわけないよな。。。

先生「よし！今日はこれで終わりだ！明日は教材配るだけだからなー。」

蘭「よし。帰ろう。」

優成「バリ早いですね。」

巴「よし6人揃ったし帰るか！」

つぐみ「蘭ちゃんー？新クラスどうだった？」

蘭「普通かな」

モカ「いつも通りに蘭はクールだね。」

蘭「うるさいっ！」

優成「あ！そうそう！蘭を探したも……」

ボカツ。ボカツ。ボカツ。ボカツ。ボカツ。

優成「痛っ！殴らないでよー笑」

蘭「黙って」

優成「はい」

巴「相変わらずだなーハハツ」

ひまり「そうだ！皆で羽沢珈琲店行こうよ！」

モカ「モカちゃん、賛成。」

蘭「行く。」

巴「私も行くよ！」

優成「めんどくさいけどー、最近行ってないし行くか！」

蘭「一言いらない。」

優成「すいません。」

「いらつしやいませー。」

つぐみパパ「優成君ではないか。久しぶりだね。元気にしてたか？」

優成「おかげさまで！」

蘭「先に注文してるよ」

優成「わかった。」

つぐみパパ「少し話そうではないか。」

あ、嫌な予感するよ。

ゴニヨ。ゴニヨ。ゴニヨ。ゴニヨ。ゴニヨ。ゴニヨ。

見事当たった。

つぐみパパ「また来てな。」

つぐみ「皆またね！」

結局話で終わっちゃった。

優成「俺だけ、つぐみパパと話して終わりってどういうことやねん。」

蘭「フフツ。どんまい。」

モカ「蘭が笑った。可愛いですな。」

ひまり「蘭が笑ってる時、めっちゃ輝いてる！いいなあ。」

巴「蘭は笑ってる時が一番だな！」

優成「そうだよな。」ウンウン。

蘭「うっさい！／＼／＼」タタツ。

優成「どっか行っちゃった。アイツってなんかよくわからんけどすぐ逃げるよな」笑

ひまり・巴「もしかして、赤面して逃げてることに気づいてないのか？」

モカ「つまり、そういうことですな。」

巴「優成。羽沢珈琲店行く前に言いかけたことってなんだ？」

ひまり「あ！それ私も気になる！教えてよー！」

モカ「モカちゃんも気になりますな」

優成「あー、それは」

今喋ったら家に帰れない気がするのなぜ？



ひまり「どうかしたー?」

優成「あ、いや。…何の話をしようとしてたんだっけ忘れちゃった。  
アハハ。」

モカ「モカちゃん、かなしいよ。」

巴「まあ、また思い出したら話してくれ!」

ひまり「えー!気になるよー!」

優成「まあ、また今度な。」

優成「じゃあ俺はここで。」

モカ「ゆーくん、またね。」

巴「またな!」

ひまり「今度はちゃんと話してよ!」

優成「今日は1人か。夕飯一人は寂しいのう。」

蘭「ねえ。私も夕飯食べる。今、親いなくて。鍵どこかに落とした。

グスツ」

…

優成「ええ??バカか?」

一緒に飯!?

……

優成「え??バカ?」

蘭「そこまで言う必要ないじゃん。」

優成「いや、鍵探そうぜ。」

蘭「もう暗いから。あつたとしても見えない。」

優成「じゃあ…」

蘭「わたしとご飯食べるのやだ?」

優成「そういう訳では無いけど、」

蘭「じゃあ食べよう。」

という事で半強制的に飯を一緒に食うことになりました。  
何故かわからんけど、ちよびつと緊張してる。

優成「夕飯はカレーですね〜。」

蘭「カレー作れるの?」

優成「自宅に用意されております。」

蘭「だろうと思った。」クスツ

優成「なんだよそれ。酷いな。」

家についた。ドアを開け、リビングの端っこに荷物を置く。  
チンして、カレー完成。

優成「ほれ。」

蘭「ありがとう。」

……

なんでこんな気まづくなくなるんねん

優成・蘭「…そーいえば!」

優成・蘭「どーぞどーぞ。」

優成「いや、どーぞ。」

蘭「そつちが先に喋ってよ」

優成「はいはい。お前、自己紹介雑魚すぎん?笑」

蘭「いや、そんなに目立ちたくないだけ。」

優成「蘭は俺と同じ苗字だからさ、嫌でも目立つよ笑」

蘭「なんであんと同じ苗字なのさ。」

優成「いや、知らんわ。」

カレーをお互いが食べ終わったので、蘭の皿を取って台所に洗いに行った。

蘭「あ、あのさ！今日の自己紹介の時間の時にさ、最後辺りに話してた有村明日香さんだっけ？あんとその子の事、ガン見してなかった？」

優成「ん？そ、そんな事ねーよ笑。見間違いだろ笑」

蘭「凄い焦ってる気がするんだけど笑」

優成「あれ？お前のバックの手前のポケットになんか入ってないか？」

蘭「あ、ほんとだ。」

優成「そうか。良かったじゃん！」

蘭「今、頭などでしようとしたでしょ？撫でる癖直した方がいいよ？」

優成「いや、癖だからしよーがないよ。あと、お前も今日の朝嬉しがつt」

蘭「それはその時の私が落ち込みすぎてただけ。もしそれを見てた女子が勘違いするかもでしょ？だからやめた方がいいよ。」

優成「マジかー。撫でるの気持ちいいんだけどなー。落ち着くし。」

蘭「変態。」

優成「気持ちよくないです。嘘です。」

蘭「とりあえず、帰るね。今日はありがとう。」ニコツ

優成「おお笑った。そして、走った。おお速いな。」

side 蘭

「はあく。ため息つくの治さないとなく。あいつは多分、有村明日香

さんの事気になってるんだろーなー。有村さんも優成の事チラって見てたし。」

なぜか気持ちが悪く沈んでく。なんでだろう。

「応援するしかないよね。あのバカ幼なじみを。」

---

side 優成

「有村さんか。可愛かったなー。多分こっち見てたし。」

久々に恋愛というやつに興味湧いたかもしれない。

## 学校2日目

ジリジリジリジリッ

あー…ねみい…。

ピンポーン。

母「まだ起きてないの？蘭ちゃんが待つてるわよ。早く行きなさい！」

優成「ごめん。5分位待つてーって言つてといて。」

そう言い、支度を済ませ歯を磨く。朝飯抜きだな。

優成「準備よし。じゃ、行つてきまーす。」ガチャ

蘭「遅い。」

モカ「遅刻したので、パン1個の罰です。」

ひまり「5分も遅刻したんだよー！」

優成「わるいわるい。つてか蘭以外もいたんだ。」

モカ「あれれ？二人つきりが良かったのかな？」

蘭「モカ！／／うるさい！／／」

なぜお前が照れるんねん。

優成「そんなモカちゃんに罰。パン帳消しの刑。」

モカ「そんな事したら、モカちゃん、泣いちゃうよ。」

巴「ほんとにモカはパン好きだよなく笑」

モカ「もちろん。パンはモカちゃんにとつて、命なのですよ。」

つぐみ「あ！そろそろ時間が危ないから行こっか！」

この調子で皆と話を続けていたら、あつという間に学校に着いた。

優成「俺と蘭こっちだから。」

モカ・ひまり・巴・つぐみ「じゃあね（な）（〜）！」

あー眠いな。それにしても。そう思って俺は席に着く。蘭も席に着いたようだ。

???「優成くん？ちよつと話さない？」

優成「ん？あ、いいよー！」

有村さんが話しかけてきた!?それと同時にとても強い視線を感じる。

明日香「優成くんと蘭ちゃんって、一緒に登校してたけど付き合ってるの？」

優成「え？付き合っていないよ笑。幼なじみだったからさ。ただ一緒に登校してるだけだよ。」

明日香「そうなんだ。なんか安心した〜。」

ドキツとしてしまった俺がいた。

キーンコーンカーンコーン。ガラツ！

先生「皆さん席に着いてください。」

そう言つて朝のホームルームが始まった。

その後、各教科の最初の授業を終わらしていき、昼になった。

巴「優成！蘭！ご飯食べに行こーぜ！」

優成「おうまって!!今行く！」

蘭「先行つてて。すぐ行くから。」

昼飯にふさわしい所を見つけ、すぐ円のような形で座って、喋りながら食べる。

モカ「蘭遅いね〜。」

優成「ああ。何してるんだろ〜うな。先行つてて、とは言つてたけど。」

---

side 蘭

有村「蘭ちゃんは優成くんのが好きなの？」

蘭「い、いえ。そんなことないですど。／＼」

有村「じゃあ、良かった。中学生の時に、優成くんとは違うクラスだったのだけれど、体育祭の時の姿がカッコよくて、好きになつてたんです……」

蘭「……。なんで私に言うんですか？」

有村「それは、あなたは好きでもないのに優成くんと毎日沢山いることが羨ましくて。なので優成くんに近づかないでくれますか？」

蘭「……。ダツ！」

---

優成「蘭遅いなく。あ、来た。よ！遅かったn」  
蘭「どっか行って。」  
優成「え？」

## 蘭の感情

蘭「どっか行つて。」

優成「え？」

巴「蘭！急にそんなこと言い出してどうしたんだよ！」

蘭「巴には関係ない。」

巴はとても怒っている。今にも手を出しそうだ。

優成「どうしたんだ？俺が何かしたか？何かしていたのならごめんな。」

蘭「……。グスツ。ダツ。」

つぐみ「蘭ちゃんどーしちゃったんだろう……。」

モカ「ゆーくん。追いかけるしかないでしょ。」

優成「お、おう。」

ひまり「何があつたのかよく分からないけど頑張つて！」

side 蘭

「なんで私、有村さんの言葉にすごい反応しちゃったんだろう。優成もあの子のこと気になってるし。それでいいじゃん。なのになん……」グスツ

こんなに胸が痛いのだろう。

キーンコーンカーンコーン

優成「結局見つからなかった……。まあでも帰ってくるか。」

有村「優成くんー？今日さ、帰り一緒に帰らないー？／／／ダツ。」

誰か走ってたな。

優成「いや、ごめんな。いつも一緒に帰ってる奴がいて、そいつらと今日も帰るからさ。」

有村「……。」



side 蘭

「何してんだろう私。優成と有村さんが話してたって私には関係ないじゃん。なんで、逃げちやうんだろう。」

??? 「あく。やっぱりここにいたんだく。」

蘭 「モカ。なんでここにいるの。」

モカ 「それはモカちゃんのセリフです。なんでゆうくんにあっち行ってなんて言ったのく?」

蘭 「モカには関係ない。」

モカ 「そー言っつてすぐ逃げようとするく。」

蘭 「うるさい！」ダッ

モカ 「あく、逃げられたく。」

キーンコーンカーンコーン

先生 「今日は終わりだ。2日目なのにいきなりサボりもいたが、そうならないように。」

優成 「ひまり！蘭を見なかったか？」

ひまり 「それがく…蘭がどこにもいないんだよー！」グスツ

優成 「やっぱそうかく。あ！」ダッ

ひまり 「つてどこいくのく！」

「あーあ。ホントに何してるんだろう私…。これじゃあ、優成と一生話せないよ…。」グスツ

優成 「話せたじゃん。良かったな。」  
ドカッ

優成 「痛いな。いきなり殴んなよ笑」

蘭 「なんでこの場所がわかったの？」

優成 「そりゃあ、ここはお前がいつもお世話になってる場所2号だ

からな。2号でいいか？」

蘭「なにそれ。」クスッ

優成「おい、ひでえな。俺がせつかく2号って名をつけたのに。」

蘭「ハハッ。」

蘭はやっぱ笑顔が綺麗だなく。

優成「綺麗だなく…。」ボソッ

蘭「そうだね。夕日がすごい綺麗で…。」

はっ！良かった。バレてない。

蘭「よし決めた。私はいつも通り過ごすよ。」

優成「おう！そうだな！」

何を言ってるのかサツパリだが。

優成「じゃあ、授業中寝んなよ。」

蘭「そ、それは知らない。」

優成「蘭が元気になった事だし、俺は帰りますか！じゃ！また明日

！」

蘭「ねえ。」

優成「ん？なんだ？」

蘭「いや。やっぱなんでもない。また明日ね。」

優成「お、おう。」

## 慣れてきた学校

学校が始まって一週間が経つ…

母「荷物ちゃんと持った？」

優成「持つてる。じゃあ、行ってきます。」ガチャ

「おはよう(〜)！」

優成「よし。行こーぜ。」

蘭「優成。宿題やった？」

優成「なんだそれ？」

モカ「ゆーくんくちやちやったね。」

巴「ドンマイだな！」

ひまり「宿題？」

つぐみ「A組だけの宿題だから大丈夫だよ！」

ひまり「良かった〜！」

優成「俺もB組が良かったな〜。」

蘭「あ、じゃあ私と優成こっちだから。」

「またね(〜)！」

キーンコーンカーンコーン

先生「宿題のことだが、朝から色々と先生方は忙しいので放課後に出すように。では、授業サボるなよ〜。」

優成「よし！蘭見せてくれ！」

蘭「やだ」クスツ

優成「うわ〜。蘭ひどい。こーなったら、あのこと言っちゃおうかな〜。」

蘭「貸すから！／／」ボコツ

優成「殴る必要なかっただろ！」

有村「…」ジロツ

ガラッ

巴「優成！蘭！お昼食べようぜ！」

優成「おっけい！蘭行くぞー！」グイッ

蘭「ち、ちよっと！／＼／」

ザワザワ

「優成さんと蘭ちゃんってベストカップルって感じるよね。」  
「それわかる。」

有村「チツ…。」ジロツ

モカ「やっぱり、昼ごはんはパンに限りますな。」

巴「モカはいつもパンしか食ってないだろ笑。」

優成「そんなにいっぱい食ってたら太るだろ。」

モカ「いいのいいの。ひーちゃんにカロリー送ってるから。」

ひまり「や、やめてよ！」

蘭「この会話、ほんとに面白い。」クスッ

つぐみ「でも、多少は健康を意識した方がいいよ！」

モカ「つぐみ心配ありがとう。」

優成「う…。」

蘭「どうしたの？」

優成「とてつもなくお腹痛い。」ダッ

モカ「ゆーくんに、大きな試練が待ち受けていますな。」

優成「あ、空いていない…？だと？こ、こーなったら職員トイレを  
使うしかない！」

ダダッ

優成「間に合った…。」

こ、これは！過去最大かもしれん…。

ガシヤー

優成「よし。戻るか。」

「いや、明日香の方があんなやつより良いよ！」  
「そうそう！明日香が負けるわけないじゃん！」  
有村「それもそうね。」  
優成「何の話をしてるんだ？ま、いい戻ろう。」

蘭「離して！」

巴「離せよ！」

ん？あれは、他クラスの男子か？

優成「おい。嫌がつてんだろ。離せよ。」

???「俺の名前は齋藤明。お前、うぜえんだよ。」

優成「は？ちよつとよく分からないんだが。」

明「よし。お前らやれ。」

「おけい。」

「任せろ。」

1人は素手だがもう1人は武器を持っている。明つてやつはなんもしてこなさそうだな。

「オラッ！死ね！」

優成「見え見えだろ。」ガシッ

「痛っ！」

「今のうちだ！死ね！」

優成「二人で来てこれかよ。」ガシッ      ボコッ

「優成（ゆーくん）！後ろ！」

明「俺がなんもしないと思つたか？オラッ死ね！」

バンッ      ボコッ      ボコッ

## 優成への悲劇

「優成（ゆうくん）！後ろ！」

明「俺が何もしないと思ったか？死ね！」

バンツ ボコツ ボコツ

明「ざまあねえな！w」

優成「くっ！痛てえ。」

明「まだ終わってねえよ！クソが！」

ボコツ バンツ バンツ

優成「くっ…。」

バタツ

巴「おい！やめろ！」

モカ「やめて…」

明「……。悪い。」

蘭「え？」

明「…。そー言うとも思ったか？」

「明さん！こいつはどーしますか。」

明「じゃあ、ずーつと殴ってろ。」

つぐみ「やめてください…。お願いします…。」

蘭「あんた！！」

明「口は悪いけど、まあまあいいもん持ってんじやねえか。」

モカ「蘭！」

ひまり「…」ビクビク

巴「おい！」

パンツ！

明「邪魔すんなよ。」

つぐみ「巴ちゃん！」

「ぐあっ！」

バタツ

優成「お前…。蘭たちに何した？」

明「チツ。使えねえ奴らだ。威勢のいい子にちっと罰を与えただけ

「だけど？w」

優成「…。」

ボコツボコツボコツ

明「くっ！お前はもう動けないはずじゃ！」

優成「…。」

ボコツボコツボコツ

明「うっ…。」

バタツ

優成「…。」

モカ「ゆーくん…。ありがとう。」

巴「え？」

バンツ ボコツ ボコツ ボコツ

蘭「優成！もう大丈夫だよ！」

優成「…。」

ボコツ

バタツ

つぐみ「せ、先生呼んでくる！」

ピーポーピーポー

医者「出血が多すぎる！」

「血が止まりません！」

医者「クソっ！」

タツタツ

ひまり「私、あの時何も出来なかった…。」

つぐみ「…。大丈夫だよ！優成くんなら助かるって！」

蘭「大丈夫。あいつはそんなヤワじゃないから。」

ガラッ！

医者「とても危ない状況でした。奇跡的に助かったようなもので

す。あんな頭をぶたれてよく…。とにかく安心してください。「よ、良かった。」

ガツクリ気が抜けたように腰を下ろす。

医者「目が覚めるまで支えてあげてください。」

「はいー！」

タツタツ

母「優成は大丈夫なんですか！」

医者「はい。大丈夫です。しかし…。」

母「しかし？」

医者「ふうー…。すみません。今からお話することは本当のことです。実は…。」

母「!!」

手術から2日経つ。

優成「はっ！俺は！」

下半身あたりに圧力を感じる？誰だこいつ。

蘭「優成？目覚めたの？」

優成「お、おう！お前か！ってか離れるよ。恥ずかしいな笑。」

蘭「いつもならそんなの気にしないのに。まあいつか。意識戻ったことだし。」

看護師「あら優成くん。目覚めたんですね！この子、ずっとあなたが寝ている時、そばに居てくれたんですよ！ちゃんと感謝してくださいね！」ニコツ

優成「は、はい！ありがとな！」

蘭「う、うん／＼／」

母「あら！蘭ちゃんこんにちわ！」

蘭「優成のお母さんこんにちわ。」

これが…!?

母「蘭ちゃん。優成と二人で話したいことがあるからちよつといいかな？」ニコツ



蘭「全然大丈夫ですよ！」

母「蘭ちゃんが居なくなっただ事だし、話しましょう。」

優成「お、おう。」

母「あなたは今までの記憶を大体失くしてしまっているの。」

## 今までの記憶

母「あなたは今までの記憶を大体無くしてしまっているの。」

優成「やつぱりそうか。さつき居たやつもあなたの名前も知らないからな。」

母「冷静ね。そんなに早く対処できるなんて思ってもなかったわ。」

優成「自分でもわからんけど、なにか失ってるってのは分かる気がする。」

母「私の名は美竹由香。まあ母親だから母さんでいいけど。さつき来た子は美竹蘭っていうのよ。」

優成「え？もしかして家族？兄妹？」

母「いや、奇跡的に私達の苗字と蘭ちゃんの苗字は一緒なのよ。面白いわよね。」ニコッ

優成「そうなのか。」

母「蘭ちゃんは優成の幼なじみの1人だわ。」

優成「ああー。そういう事ね。」

母「蘭ちゃん以外にも幼なじみが他に4人いるから。」

優成「まじ!?マジで記憶ねえよ。」

母「青葉モカちゃん。上原ひまりちゃん。宇田川巴ちゃん。羽沢つぐみちゃん。」

優成「ほー。で、それぞれの特徴とかはー？」

母「モカちゃんはく…」

優成「なるほど。まああいつらにバレンよう頑張るわ。」

母「え？もしかして記憶失くした事言わない気？」

優成「幼なじみの奴らに言ったら、思い出させようとしつこくなる気がしたからな。」

母「じゃあ、頑張るのよー。私は帰るね。」

ガラッ

「優成(ゆーくん)(〜)！」

ゆーくんとは？

グキッ

優成「お前ら痛い！笑」

ひまり「ホントに良かったであ〜!!」ナキナキ

こいつがひまりか。

モカ「ゆーくんパンを1個、モカちゃんからのプレゼントです。」

でこいつがモカか。

巴「無事でほんとに良かったな！」

つぐみ「うん！」

ともえにつぐみか。

蘭「優成ほんとにありがとう。私たちを守ってくれて。」

えーと、そーいえば俺って何で記憶失くしてるんだっけ？守るってなんだよ？

優成「あ、ああ！」

巴「モカ？どうしたんだ？」

モカ「ともちんよく気づいたので。モカちゃんセンサーが反応しました。」

優成「モカちゃんセンサー？」

モカ「ゆーくん。何か隠し事があるのでは〜？」

もう言っちゃうか？いや、まだ話さなくていいか。

優成「いや、何にもないよ。心配してくれたお礼として、モカにパンあげます。」

モカ「パン〜。美味しい〜。」

つぐみ「そーいえば、優成くんってどのくらいここに入院する予定なの？」

優成「んーとな。いうて、1週間くらいだからすぐ戻るよ。」

蘭「良かった。」ホッ

ひまり「早く元気になつてね！」

巴「優成が居ないから蘭は教室でいつも落ち込んでるよな笑。」

蘭「ちよっと！巴！ちがうし！」

モカ「蘭〜。かわいい〜。」

蘭「うるさい！／／」タツタツ

つぐみ「蘭ちゃん走って行っちゃったね。」

ひまり「巴とモカがあんなこと言うからだよ〜!」

巴「まあまあ。良いじゃんかって。ちよつとくらいからかっても。」  
ひまり「でも〜!」

つぐみ「あ、もうこんな時間だ!そろそろ帰らないと!」

巴「また明日来るからな!」

モカ「ゆーくん。また明日のですよ〜。」

つぐみ・ひまり「じゃあね!」

優成「あ、ああ!またな!」  
ガラツ

医者「優成くん。本当にあの子達にあなたの事情を話さなくていいんですか?」

優成「話すと、あいつらが気を使っちゃまうからかな。」

医者「そうですね。あなたの自由なので特にそれは口出しはしません。学校には伝えましたよ。」

優成「ああ。分かった。」

## お久の学校

あれから1週間経つ。

優成「痛てえ。」

記憶失ってから朝起きる時、毎回頭痛くなるのだが。最悪だ。

優成「今日から久しぶりの学校か！まあお気楽に行きますか！」

飯食って、歯磨いて、準備をパパッと済ませ、

優成「じゃ、いつてきます！」

ガチャ

「優成（ゆーくん）（〜）！おはよ（〜）！」

優成「おはよ！」

蘭「優成。頭はほんとにもう大丈夫なの？後遺症とかないの？」

優成「ああ。ない。心配すんな。」

モカ「心配してる蘭、かわいい〜。」

蘭「／／／∴。」

モカ「およ？」

ひまり「あー！最悪だよー！宿題の事忘れてた〜！」

巴「はは！ひまりはドジだな！」

つぐみ「巴ちゃん。ストレートだね。」ハハッ

そう話してるうちに学校に着いた。

「じゃあ（〜）！」

キーンコーンカーンコーン

先生「1時間目は〇〇先生が出張なので自習です。優成くん。後で職員室に来てください。」

蘭「優成なんかやった？」

優成「喧嘩の事だろ？処分についてじゃね？」

蘭「ふーん。」

ガラッ

優成「失礼します。」

先生「優成くん。頭は大丈夫？」

優成「はい。大丈夫です。」

先生「単刀直入に言うけど、優成くんが記憶をなくしたことを皆に言おうと思うの。」

優成「えーと。この事は皆に言わないでください。お願いします。」

先生「そ、そう。困ったことがあったらいつでも言ってね！」

優成「分かりました。ありがとうございます。では失礼します。」  
ガラッ

先生「優成くん。少し性格変わったかな？」

先生「単刀直入に言うけど、優成くんが記憶をなくしたことを皆に言おうと思うの。」

：

明日香「え？記憶喪失？」

：

キーンコーンカーンコーン

明日香「優成くんちよつといい？」

優成「いいよ。」

明日香「優成くんと一緒に帰る約束をこないだしたんだけど。覚えてる？だから、今日一緒に帰ろ？」

えつと？帰る約束か。記憶ないけど。したんだろ。

優成「おっけ。じゃあ、一緒に帰るか！」

明日香「う、うん／＼／」（ほんとに記憶ないんだ。）

キーンコーンカーンコーン

巴「蘭！優成！帰ろーぜ！」

蘭「うん。ほら行くよ。」

優成「あーごめん。今日、有村さんと帰る約束してたらしいから  
や。」

蘭「…。わかった。」(らしいからさ?)

優成「悪い。待たせた？」

明日香「い、いえ／＼／＼」

優成「じゃあ行くか。」

明日香「はい／＼／」

優成「どうかした？」

明日香「あの…、今、お返事を返そうと思って。」

優成「へ…?」

ちよつとまで。お返事って?なに?俺この人に告ったの?

明日香「私も同じ気持ちです!これからよろしくお願いします／＼」

え?ええー!

## 有村の嘘

明日香「私も同じ気持ちです！これからよろしくお願いします／＼」

え？ええー!?

優成「え、えーと？」

マジでよく分からないんだが。記憶失う前の俺は何してんだよ。

明日香「私、優成さんと付き合えるのが夢で／＼」ナキナキ

優成「いや、泣くなよ笑。」

いや、どう答えればいいんだ？???とりあえず、

優成「用事があるから今日はこれで帰るわ。」

明日香「は、はい／＼。明日からよろしくお願いします／＼。タツタツ

マジでなんだったんだろ。そもそも、記憶を失う前まで俺はどんなやつだった？

優成「なあ母さん。記憶を失う前の俺ってどんなやつだった？」

母「えーとね、すぐに人の事を撫でる癖があるかなー。あと、蘭ちゃんの事が気になってだんじやないかな？笑」

優成「俺があいつのこと…？いや、ねえだろ笑。」

でも、もしそうだったら有村さんは？俺はいつ言ったんだ？明日聞くしかないか。

母「やつぱり、蘭ちゃん達に話した方がいいんじゃないのかな？」

優成「話したくない。話すとしてももつとにする。」

母「そう。私は話した方がいいと思うけど。先生が言ってたけど、あの子達と一緒に居れば、少しずつ記憶が戻るかもしれないって言われたわよ。」

優成「うん知ってる。だからバレないように少しずつ記憶を戻していききたい。」

母「話した方が効率いいと思うけどなく。」



優成「もういいや。おやすみ。」  
母「おやすみ。」

ここで閃いてしまった。あいつらに聞けばいいんだ！

ピヨピヨピヨピヨ

優成「はっ！やっぱり頭いてえ。」

いつもより1時間起きるのが早いし、散歩でもするか。

優成「昼飯用にパン買ってくか！」

バタンツ

「いらっしやいませー。」

???「むむむ、ゆうくんではありませんか。」

優成「モカも来たんだな。」

モカ「モカちゃんは、朝昼夜のパンを買い込んでいるのです。」

優成「そんなに買うのね笑。」

モカ「このままゆうくん家向かっちゃおう。」

優成「ほい。」

優成「な a」

巴「今日は優成もモカもはやいな！おはよ！」

モカ「ゆうくん？」

優成「えーとね。巴にも聞いてもらうか。俺の好きな人って知ってる？」

モカ・巴「え？」（これってもしや蘭のことを…！）

優成「やっぱ知らない？」

モカ・巴「いや（う）、イニシャルで。ずばり（う）、R・M」

優成（R・Mか。じゃあ有村は違うってこと？いやシンプルにこいつらが知らないってことがあるかもだし。）

モカ「ゆーくん。凶星？」

優成「ん、んん？いや、ちよつと確かめたいことがあってさ。」

巴「そんなに真面目にそんな事言われてもな〜笑」(一瞬キョドってた！)

優成「ごめんごめん笑。」

ひまり「到着ー！何話してたのー？」

モカ「ひーちゃんには、まだ早いのです。」

ひまり「なにそれー！ひどいよー！モカ〜！」

蘭「朝から忙しいね笑。おはよ。」

巴「朝から蘭の笑顔見れるなんていいな！優成！」

優成「おう！そうだな！気分がいい！」

蘭「…！／／も面白い！いくよ！／／」

モカ(ゆーくん積極的だなく。)クスッ

キーンコーンカーンコーン

ザワザワ

「ねえねえ。明日香と優成くんって付き合ってるらしいよ。」

「マジで！で、どっちから言ったの？」

「優成くんらしいよ。」

「ま！そうだよな！明日香から言わなさそうだしな！」

蘭(え？どういうこと?) チラッ

優成「…。」バンッ！

ガラッ！

最悪だよ最悪。有村さんが広めたのか？こうなったらやけくそだ。有村さんに直接行くしかねえな。

ダッ

蘭「…。」グスッ

ガラッ

巴「蘭！ちよつといいか？」

蘭「なに？」

巴「ゆうせいのお噂。」

蘭「…。で。なに？用がないなら教室に戻るよ。」

ガラツ

巴「あ…。」（私にはわかる。優成が蘭のことを好きだつてこと。多分あれは変なお噂だ。）グツ

巴「本人に聞いてやる。」

優成「おい！有村ちよつといいか？」

明日香「な、なに？／＼／＼」

「きゃー！ベストカップルよねー！」

明日香「…。／＼／＼」

人気のいない所に。言つて聞いてやる。

優成「こちら辺でいいか。じゃあ聞くけど、俺つてお前にどーやつて告つたつげ？」

明日香（え？ば、ばれてる?!）

明日香「い、いや。優成くんが夜呼び出して。」

優成「そつか。変なこと聞いてすまん。」

これ以上行くと泣かせそうだな。とりあえず教室戻るか。

---

side 巴

巴「こちら辺にいる気がするんだけどなー。本当にいたし。やべつ！」

優成「こちら辺でいいか。じゃあ聞くけど、俺つてお前にどーやつて告つたつげ？」

巴（？）

明日香「…。」

明日香「い、いや。優成くんが夜呼び出して。」

巴（え？告った時を忘れてるのか?!おかしいよな。夜か。よし、聞いてやる！

## 真相

キーンコーンカーンコーン

先生「今日の授業はこれで終わりだ。忘れ物するなよー。」  
ガラッ

巴「優成！蘭！帰ろーぜ！」

優成「お、おう。」（なんて話せばいいんだ。）

蘭「う、うん…。」

ひまり「モカ〜！どーするの〜？」

モカ「ゆーくん！に直接聞くしかないのです〜。」

つぐみ「やっぱり、それしかないよね…。」

巴「待たせて悪い！帰ろうか！」

「…。」

「…。」

「…。」

巴「あ、あのさ！優成と有村さんが付き合ってるってホントか？」

優成「…。」

巴「教えてくれ。」

優成「…。」

巴「幼なじみなのにそんな事m」

つぐみ「巴ちゃん。優成くん苦しそうだから…。これ以上聞くのはやめよ？」

巴「っ！」

モカ「ともちん〜。ストップストップ〜。」

ひまり「言えなかったら言わなくていいんだよ？」

優成「そんなの分かってるよ。じゃあ、俺こっちだから。」

蘭「…。」

つぐみ「あれって、有村さんじゃないかな？」

明日香「急にどうしたんですか？あー、あなた達は優成くんの幼なじみですね。」

巴「そうだが。聞きたいことg」

蘭「あのさ、優成と付き合ってるって本当？」

明日香「は、はい／＼／＼。」

蘭「いつ優成から言われたの？」

明日香「なんであなた達に教えないといけないんですか？用事があるので帰ります。」

ひまり「ちよつと〜！」

モカ「行っちゃいましたなく。あれは怪しい匂いしますなく。」

巴「後日聞いてみるしかないよな。」

優成「ただいま。」

母「おかえり〜。」

優成「夕飯いらないわ。」

母「ええー！なんかあったの？」

優成「いやー。なんも。」

優成「はあ〜。」

あいつらに相談するしか〜。いや、そしたら記憶の事も言わないといけないよな。ん〜…。

ジリジリジリジリ

優成「相変わらず頭いてえな。さみいし。今日は寝よつかな。」

よし。

優成「か、母さん…。ゲホツ。風邪かもしれない…。ゲホツゲホツ。」

母「バカね〜。記憶取り戻そうと必死になり過ぎないでよ〜。今日は学校に休み入れとくから。ゆっくりしなさい。」

優成「(よゆう。じゃあ寝ますか。)」

つぐみ「優成くん来ないね…。」

ひまり「また寝坊だったりー！」

モカ「多分違うと思うよ。」

巴「これはサボりの予感するな。いちよ優成家行くか。」

ひまり「ちよっと昨日の事で気まづくなっちゃいそう…。」

蘭「…。」

巴「じゃあ行くぞ。」

ピンポーン

優成母「あら。蘭ちゃん達じゃない。あいつ言ってるのか！ごめんね。今日はいつ風邪っぽくて調子悪いから休ませるの。」

巴「そういう事なんですネ！」

つぐみ「お大事にしてください！」

モカ「ゆーくんにこれをお願いします。」

優成母「パン？」

ひまり「モカ〜！こんな時も〜！」

蘭「…。」

優成母「蘭ちゃん？」

蘭「…。あ、はい。優成にお大事になって伝えといてください。お願いします。」

優成母「ふうー…。」

「？」

巴「どうかしましたか？」

優成母「優成には言わないでって言われたけどやっぱり言うべきだと思うから、自分勝手だけどあなた達に話したいことがあるの。」